ご無沙汰しております、JUNKMAN です
またまたおなじみガリバー旅行記からツイストしてお笑いを書いてしまいました
というわけでスウィフト・ワールドから設定をいただきましたが、JUNKMAN の既報の書き物（ローラ王女様とか、ドロシーとか、マーナちゃんとか）の世界とは別物ということでお許しください
だって整合性を考えるのが面倒くさいし・・・
この世界では、リリパット/ブレフスキュ：エゲレス/日本：ブロブディンナグ＝1：40：1600 のサイズ比だということになっています
特に警告はしておりませんが当たり前のように R18 です、グロくはありませんけどね

ガリバー娘の冒険
By JUNKMAN

わたしの名前はガリバー娘
・・・
うそうそ、もちろんそんなの本名のはずないでしょ！
わたしが勝手に名乗っているだけ
数百年前、このブロブディンナグに流れ着いた伝説のこびと、レミュエル・ガリバー様
わたしはこのお方に憧れてるの
だって凄いじゃない

いま、手の中にあるこのお人形
伝えられているところによると、これはレミュエル・ガリバー様の等身大の姿なんだって
身長は 5 ブロブディンナグ・センチメートルもないのよ
そんな小さな身体で、七つの海を乗り越えて、はるばるこのブロブディンナグにまでやってきた
この国に引きこもりっぱなしの情けないブロブディンナグ人の男たちには及びもつかない勇気だわ
このお人形はわたしの大切な宝物
わたしはそんなレミュエル・ガリバー様のことを慕っているうちに、思い立ったの
わたしも、冒険の旅に出たい
この目の前の荒海を乗り越えて、見知らぬ土地に行ってみたい
そう、そしてレミュエル・ガリバー様の故郷、エゲレス国を訪ねたい
レミュエル・ガリバー様みたいなこびとが沢山住んでいるエゲレス国
そこに行けば、わたしはきっと大巨人よ
巨人になって、こびとの国を闊歩するの
考えるだけでわくわくしちゃう
だけど、そこに着く前に、どれだけの苦労が待ち受けているかわからない
どれだけの危険が待ち受けているかわからない
荒波に呑まれて、海の藻屑と消えてしまうかもしれない
それでもいいわ
この知らない世界を見てみたいという好奇心には抗えない
航海の準備をしよう
そして不安を振り払うために、自分にいいきかせたの
わたしはガリバー娘だ、と

＊＊＊＊＊

レミュエル・ガリバー様がブロブディンナグに漂着してから数百年
ここブロブディンナグもそれなりに科学は発展したわ
エンジンもあればコンパスもある
だというのに、航海技術だけはまるで未発達
みんな腰抜けなのよ、怖がって全然海に出ようとしない
だからわたしが用意できたのは小さなゴムボートが 2 艘だけ
これで行くしかないわ
エンジンを搭載した 1 艘にはわたしが乗り込んで、ロープで繋いだもう 1 艘には一週間分の食料と水、燃料
その間にどこかの島にたどりつかなければわたしは飢え死にしてしまう
大丈夫よ
きっとそれまでにはどこかの島に流れ着く
もちろんこんな危険な計画、ハイスクールの担任の先生には秘密
お父さんお母さんにも秘密
ごめんなさい
必ず元気に帰ってくるから許してね

そして雲一つない晴天のある日、まだ薄暗い明け方のうちに、わたしはこっそりブロブディンナグの浜辺を船出したのよ

＊＊＊＊＊

と、悲壮な覚悟で船出したのに、日が昇ってしばらくしたらあっさり島影が見えてきた
ここで筆者がちょっと補足説明しよう
ブロブディンナグ人のサイズは日本人などのほぼ 40 倍
だからブロブディンナグ人がジョギングするくらいの 5 ブロブディンナグ・ノットという速度でとことこ進むこのゴムボートも、実際には 200 ノットくらい出ている
換算すれば時速 350 キロメートルを超える東海道新幹線も顔負けの超高速船だ
それで数時間航海しているのだから、方向さえ合っていればたいていの島にはついてしまう
ちなみに波高 10 メートルの大波もブロブディンナグ人の感覚ではわずか 25 ブロブディンナグ・センチメートルのさざ波である
ましてや普通の海の状態はブロブディンナグ人にとってベタ凪も同然
荒海なんて、ブロブディンナグ人の妄想でしかなかったのだ
だから、たかがゴムボートとはいえ嵐で転覆などまずありえない
というわけで拍子抜けするほどあっさり未知の世界に到着してしまったのだ
やったー！
でも油断禁物
どんな危険が待っているかわからない
取りあえず上陸して身を隠すための山かげとか
・・・
見つからないわね

ざっと見た感じ、せいぜい人の背の高さくらいの岩があるだけ
後は概ね平坦な小島だ
樹木も生えていない
一面緑色の苔に覆い尽くされている
無人島かな？
まあ、いいわ、とりあえず上陸してから考えてみましょ
・・・
・・・
って
・・・
あれ？

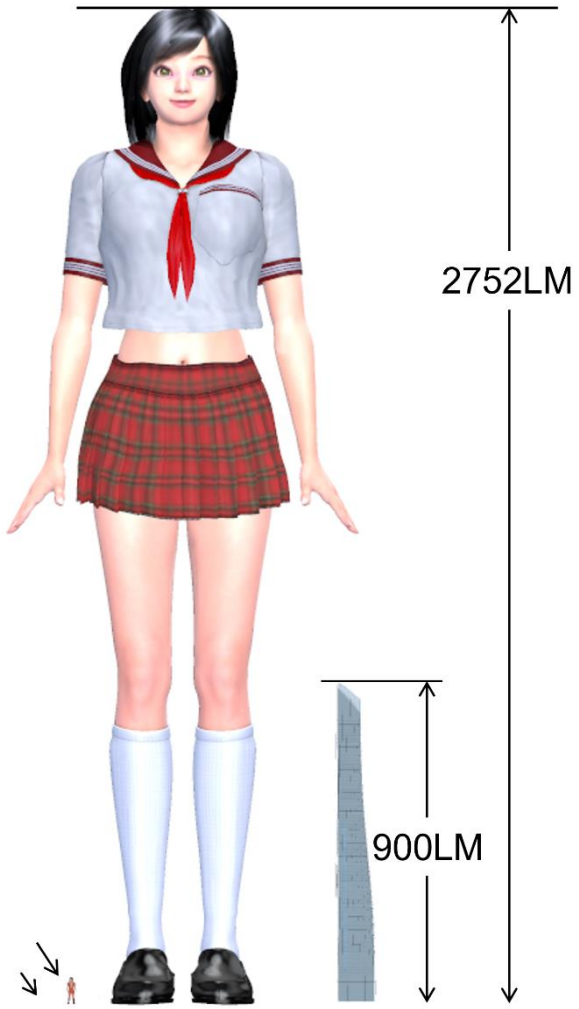
＊＊＊＊＊

「総理、大変です！」
リリパット王国総理大臣執務室に防衛大臣が血相変えて飛び込んできた
防衛大臣がこれだけ慌てているとなれば、その理由はだいたい想像がつく
「・・・ついに来たか、ブレフスキュの艦隊が」
数百年前に伝説の巨人レミュエル・ガリバーが艦隊を壊滅させて以降、隣国のブレフスキュは海軍を持たない政策を取ってきた
一方のリリパットは伝統的に軍事に力を割かない政策を維持している
結果としてこの二国間に軍事的緊張は生じず、豊かで平和的な関係が保たれてきたのだ
だが、平和とは永久に続くものではない
ここ最近になって、ブレフスキュは密かに政策を改め、再び軍事力の増強を図り始めたのだ
その意図するところは明白である
侵略に備えて慌てて防衛力を整えようとしたところで、既に戦艦や航空母艦まで保持したと伝えられるブレフスキュに対抗するには遅すぎる
軍事力の均衡が崩れたとき、次に起こることは誰にでもわかる
リリパット王国政府の緊張は否応なく高まっていた
そんな状況の中で総理大臣執務室に飛び込んできた防衛大臣だったので、その理由は推して知るべしであったが、ところが彼の報告は予想を覆すものだった
「違います、総理、ブレフスキュの艦隊ではありません」
「？」
「そうではなく、巨人が来襲してきました。わが軍の哨戒機が確認しています。このままでは間もなく北東海岸に上陸しそうです」」
「！」
このところブレフスキュ海軍の脅威ばかりに気を取られ、すっかり忘れていた
数百年前、このリリパット島にはあの伝説の巨人レミュエル・ガリバーが漂着したのだ
幸い、レミュエル・ガリバーが島で大暴れすることもなかったが、しかしこのリリパットにとって憂慮すべき安全保障上の課題となったことは確かだ
いつまた同様な巨人が来襲するかわからない
海軍こそ脆弱なリリパット防衛軍だが、この巨人対策だけは怠りなく整備し続けてきたはずだ
「・・・巨人ならば、わが国には普通に対策のマニュアルがあるはずだ。さしあたってその巨人対策マニュアル通りに行動したまえ」
「と、いいますと？」

「決まっているだろ、寝ている身体を鎖でぐるぐる巻きにして砂浜に縛り付けるんだ」
「できませんよ、そんなこと」
「数百年前には、ちゃんとそうやって対応したぞ」
「いや、だからできませんって」
防衛大臣はうんざりした表情で首を横に振る
「そもそも今度の巨人は元気いっぱいで、砂浜で寝てくれる気配もないですけど、そういう問題でもありません。百聞は一見に如かずです。総理、ヘリコプターを用意してありますので、まずはその目で状況を確認してみてください」

＊＊＊＊＊

ぱたぱたぱたぱたぱたぱたぱた
「！！！」
ヘリコプターから眼下に広がる風景を見て、リリパット王国総理大臣は言葉を失っていた
「な・・・なんだこれは」
北東海岸の浜辺に、ちょっとした島サイズの巨大なゴムボートに乗った超大巨人が接近しようとしていた
でかい
でかすぎる
同行する防衛大臣がすかさず説明した
「巨人ですが、推定身長は 2752 リリパット・メートルです」
「に・・・2752 リリパット・メートル？そんなに巨大なのか？あの伝説の巨人のレミュエル・ガリバーもそこまでは大きくなかったような」
「記録によりますと、かのレミュエル・ガリバーは身長 72 リリパット・メートルの大巨人だったとのことです。あ、わかりやすいように対比図を用意しました。超大巨人の向かって右に見えるのがわが国最大の高層建築である高さ 900 リリパット・メートルのリリパットタワービルです」



「なんと、リリパットタワービルが膝までしかないじゃないか。でかいな。で、対比図というが、レミュエル・ガリバーはどこかね？」
「あ、超大巨人の向かって左の足下に見える矢印のあの人影が、記録から再現してみた伝説の巨人レミュエル・ガリバーの大きさです」
「え？こ、これが、あの伝説の大巨人だというのか・・・全然大きさが違うな」
「ええ、あの伝説のレミュエル・ガリバーが『人間山』なら、この超大巨人はさしずめ『人間山脈』です。おお、ということは、このたびのこの超大巨人の襲来こそが、あの有名な『ひとり民族大移動』ということになりますね」
「・・・」
「いちおうこの対比図にはリリパット人も載せておいたのですが、小さすぎて見えません」
「・・・」
「ちなみに対比図からもおわかりのように、この超大巨人は女です。スリーサイズは目測で 1392-928-1344 リリパット・メートル。推定年齢 16 歳の割には早熟というか、たわわというか、スレンダーなのにいい感じに出るところは出て・・・」
「・・・」

総理大臣はもう防衛大臣の説明を聞いていなかった
あまりにも巨大な超大巨人
間もなくこのリリパットに上陸を果たすと、村を踏み潰し、山を跨いで、そして首府にやってくる
それを止める力はリリパット防衛軍にはない
・・・
どうすればいいのだ？

＊＊＊＊＊

？
・・・
何か変
・・・
苔で覆われた小さな島
周囲は１ブロブディンナグ・キロメートルもあるかどうか、というくらい
山はなく、その中心部にもせいぜい背丈と同じくらいの岩があるだけ
無人島
・・・
にしては、なんとなくだけど、人工的な感触が否めない
さっきから頭上をぶんぶん飛んでる妙な虫も気になるし
「・・・まあ、いっか」
海の上も飽きてきたし、ボートを接岸させ、狭い砂浜に上陸した
さて、あの岩の向こうには何があるのかな？
近寄って、岩越しに島の反対側を見渡して
・・・
・・・
絶句した

＊＊＊＊＊

視察を終えたリリパット王国総理大臣は急ぎ官邸に戻ると、緊急対策会議を招集した
「・・・無理無理無理、あんなの無理っす！！」
この状況になってもどことなく軽い防衛大臣は、しかし初めから戦意を喪失していた
「・・・わが国の防衛力では、武力であの巨人を撃退することは難しい、ということかね？」
「難しいどころじゃありません。無理無理、絶対無理、不可能です！」
「では、どうしろと？」
「降伏です！全面降伏するしかありません！土下座して命乞いを・・・」
「それにはまだ早いね」
「いや総理、他に策はありませんよ。国民に被害が生じる前に、一刻も早く全面降伏しちゃいましょうよ！」
「そんなこと、国王陛下に上申できんよ」
立憲君主制であるリリパット王国の元首は国王陛下である
もちろん実際の政治はこの切れ者で知られる総理大臣が牛耳っているわけだが、それにしても元首の承諾なしに勝手に全面降伏という選択をすることはできない
「防衛できなければ降伏、というのは早計だね」
ここで総理大臣は傍らに立つ首相補佐官の方に向きなおった

総理大臣の秘蔵っ子、若手のホープである
「そもそも戦闘とは、交渉を有利に進めるためのツールにしか過ぎない。そのツールが使えないからといって、交渉の道が閉ざされたわけではない、そうだよね？」
「は、はあ」
急に振られた補佐官は眼鏡をかけ直しながら頷いた
「よろしい・・・では、交渉は君に任せたよ」
「！！！」
かけ直したばかりの眼鏡が吹っ飛んだ
なんというムチャ振り
あんな大巨人に対してどうやって交渉しろと
首相補佐官の焦燥を見透かしたかのように、総理大臣は言葉を続けた
「・・・交渉はね、ギブ・アンド・テイクだよ。こちらが望む安全保障を得るためには、あの大巨人の何らかの要求を満たしてやる必要がある」
「はあ・・・」
「要求、または、欲求と言い直しても良いかもしれないね」
総理大臣は涼しい顔である
「・・・意外と、災い転じて・・・福となすかもしれないよ」

＊＊＊＊＊

この島は無人島などではなかった
岩の向こうの島の反対側には、ずらっと人工物が立ち並んでいたのだ
近代的な高層ビル街を中心に住宅地、工場、農場・・・
それだけなら普通に飛行機の窓から見下ろした遠景写真みたいなんだけど
問題は、それが実はたいして遠景ではなかったことだ
実際はほんのすぐ近く
いま覗き込んでいるこの岩の真下から向こう側に広がる、ミニチュアの街並みだった
「・・・これって、どういうこと？」
もしかして、これがレミュエル・ガリバー様の母国、エゲレス国？
こんなにあっさり、あの夢にまで見たエゲレス国に着いちゃったの？
わたしは握りしめたレミュエル・ガリバー様のお人形と見比べてみた
・・・
違う
・・・
小さすぎる
このミニチュアの街並みはこのレミュエル・ガリバー様すらも収めきれないほど小さい
こびとの中のこびとの国？
・・・
そうか
レミュエル・ガリバー様は、確かブロブディンナグに漂着する前にこびとの棲む島にも行ったことがある、っていう記述があったわ
当時のブロブディンナグでは「ナイス・ジョーク！」っていう扱いだったらしいけど、それが本当だとしたら、こびと

のレミュエル・ガリバー様から見ても更にこびとなんだから、それはそれは小さかったはずよ
ちょうどこのくらいに
えーと、なんだったっけ？
・・・
リ・・・
そう、リリパット
リリパットって、本当にあったんだ
よーし、もっと近くで見てみよう
ガリバー娘は、うきうきと足元も軽く、高層ビルが立ち並ぶリリパット国首府の中心部に歩み寄った

＊＊＊＊＊

リリパット国首府の中心部
林立する近代的な高層ビルの谷間で、ビシッとスーツを決めたビジネスマンやラフな格好をしたクリエーターたちが忙しそうに歩き回っている
何の変哲もないありふれた日常の光景だ
・・・
とん
・・・
「！」
地震かな？
足元が確かに揺れた
リリパット島の中央山地の方向が震源か？
・・・
とん
・・・
あ、また揺れた
・・・
どん
・・・
どおん
・・・
またまた揺れた
リズミカルに揺れが強くなり、心なしか震源が近づいてきた
残念ながら林立する高層ビルが視界を遮るので、ここから中央山地方向を直接望むことはできない
厄介なことが起きなければよいが
不安そうに仰ぎ見るビルの谷間の上空から、急に若い女性の声が轟いてきた

「リリパットの皆さん、こんにちは！わたしはブロブディンナグからやってきたガリバー娘です！よろしくね💛」

そして周囲が薄暗くなると、上空にいきなり超巨大な女子高生の顔が現れた
「！！！」

「きょ、巨人だあああ！！」
「でけえええええ！！！」
「逃げろ！！！」
街はいきなり蜂の巣をつついたような大騒ぎになった

＊＊＊＊＊

間違いない
これはあのリリパットだ
こびとの中のこびとの国
ということは、この国ではわたしは巨人の中の大巨人
夢想していたエゲレス国でのわたしより、更に更に大きくなってみんなの前に現れるんだ
どきどきしてきちゃった
でも、初対面なんだから、まずは礼儀が大切よね
ガリバー娘は、自分の膝丈ほどもない超ミニチュアの高層ビル街に向かって丁寧にお辞儀をした
「リリパットの皆さん、こんにちは！わたしはブロブディンナグからやってきた、ガリバー娘です！よろしくね💛」
・・・
反応は
わからない
・・・
まあ小さすぎてわからないこともあるけど、そもそも考えてみたらリリパット人たちにブロブディンナグ語が通じるわけもないわね
ガリバー娘は仕方なく街に覆いかぶさるように両膝を突いて、至近距離から街の様子を伺った

「・・・あ」
いるいる
大勢のこびとたちが走り回っている
小さいなあ
これがリリパット人か
１ブロブディンナグ・ミリメートルくらいしかないんじゃないかな
ブロブディンナグのアリさんより小さいな
これでも人間なんだ
ぷふふ
可愛いっ💛
・・・
このリリパット人たちから見たら、わたしってどんな風に見えているんだろう？
山よりもでっかい大巨人の女の子？
てへ
なんだかいい気分だな
よーし、じゃ、サービスだ
この小さなリリパット人たちに、わたしの大きさを見せつけてやろう

ガリバー娘は立ち上がると、大股拡げて仁王立ちしてみせた
「じゃーん、どう？わたし、大きいでしょ？びっくりした？」

＊＊＊＊＊

「じゃーん、どう？わたし、大きいでしょ？びっくりした？」

悲鳴を上げて逃げまどっていたリリパット市民たちは、足を止め、呆然と上空を見上げ、息をのんだ
ハイスクールの制服を着た超巨大少女が、仁王立ちしながら、リリパット国の誇る首府中枢部の超高層ビル街の遙か上空で得意そうに笑っている
でかい
ありえないほどでかい
市民たちは一様にあの伝説の巨人・レミュエル・ガリバーの言い伝えを思い出していた
当時の王宮の塔より大きな身長72リリパット・メートルの巨体を誇ったという
それ自体が信じられないような話だが、しかしその伝説の巨人・レミュエル・ガリバーが現代のリリパットに現れたとしても、この超高層ビル街では狭間に隠れて目立たなかったはずだ
この超巨大少女は、比べものにならないくらい大きい
伝説の巨人・レミュエル・ガリバーですら、この超巨大少女の前では、足元で踏みつぶされないように怯えるだけの惨めなこびとに成り下がってしまうだろう

「くふふ、こんな街、ひと跨ぎだよ。みんな、踏み潰されないように気をつけてね！」

いうなり超巨大少女はローファーを履いた右足を高々と振り挙げてみせた
呆気にとられているリリパット市民たちの上空を、その巨大なローファーはあっという間に通過して、旧リリパット王宮脇の海浜公園に着地する
ずしいいいいいいいいいいいいいん
衝撃でその場に放り上げられながら、リリパット市民たちは目の間に繰り広げられるあまりにも非現実的な現実に翻弄されていた

＊＊＊＊＊

「くふふ、こんな街、ひと跨ぎだよ。みんな、踏み潰されないように気をつけてね！」
逃げてる逃げてる
そんなこと言われたら逃げるよね
だってさ、そんな気なかったんだけど、実際ちょっとだけなら踏み潰しちゃってもいいかな？って気持ちになってきちゃったし
うそうそ、そんなつもりはないわよ
でも本当に踏み潰しちゃったとしても、結局何もできないんでしょ？
わたしなんかただの女子高生なのに、でも大巨人だから、誰も逆らえない、止められない
ああ、巨人って気分いいな
えへへ、じゃこびとたちを手のひらにのせてあげようかな
といってもリリパット人は小さすぎるので、直接指で摘まむことなんてできないし
どうしようかな？
・・・
あれにしよう
ガリバー娘は腰を屈めて港に停泊していた白い小船に手を差し伸べた

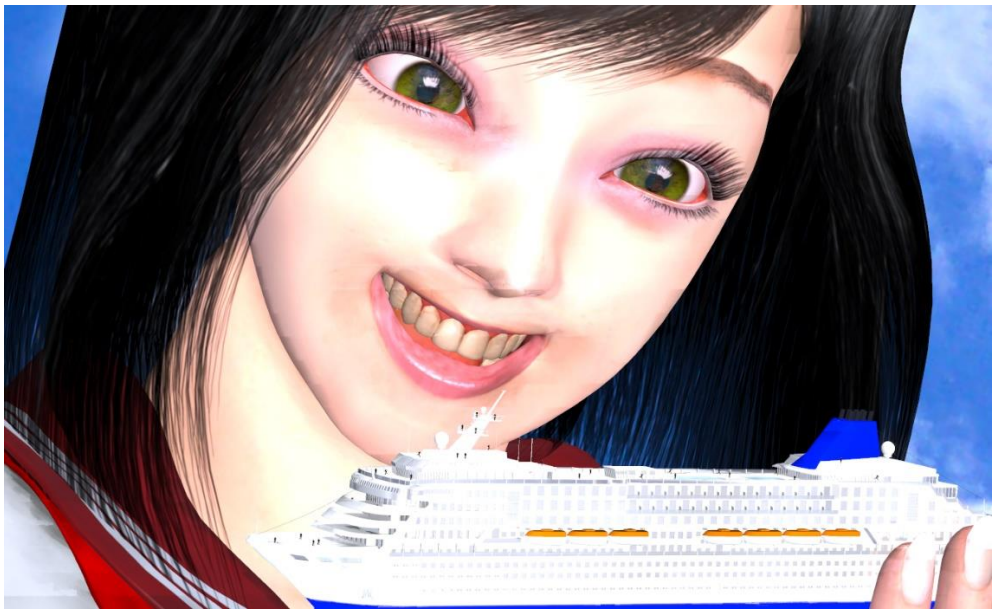
＊＊＊＊＊

港に停泊していた超大型クルーズ船は、乗客の乗船行程が終了し、いままさに隣国のブレフスキュに向かって船出しようとしているところだった
全長 320 リリパット・メートル
総重量 150000 リリパット・トン
乗客・乗務員約 5000 人を収容するこのクルーズ船はまさにリリパットの浮かぶ巨城である
身体の小さなリリパット人にとって、海洋の波浪は脅威である
ただ、リリパット・ブレフスキュ間は珊瑚礁で覆われた事実上の内海となっているので波は穏やかだ
その区間に限定すれば、この超大型クルーズ船は何ら問題なく安全に航海することが可能である
というわけで共に港町でもあるリリパット・ブレフスキュの首府を結ぶクルーズツアーは両国民の間で絶大な人気を誇るレジャーであり、今日も大勢の乗客が乗り込んできたのだ
そんなとき、首府に超巨大少女が現れた
ただ、この時点で乗客・乗務員たちは状況を何も知らない
超巨大少女が高層ビル街を跨ぎ越した際には、この大型クルーズ船も強烈な衝撃に見舞われたが、幸い転覆することはなかった
乗客・乗務員たちは不安そうに顔を見合わせる
地震だろうか？
津波が来れば厄介なことなるが、しかしこの超大型船に乗っている限り、自分たちに被害が及ぶことはないだろう
そう楽天的に判断したため、満員の乗客は比較的冷静にことの成り行きを見守っていた
もちろん、その判断は間違っていた
「あ！」
誰かが窓から船外を指さす
「あれは何だ？」
指さした方向、先ほどの衝撃の震源とも思われる港のすぐ隣の海浜公園の上に、この巨大なクルーズ船より更に一回り以

上巨大な黒い物体が鎮座していた
船か？
船に似ていないこともないが、あんな形のものは見たことがない
そもそもこのクルーズ船より巨大な船がいきなり陸上に現れるなんて不自然すぎる
何よりも、この黒い巨船のような構造物から、更にどこまで続くかわからないほどの上空に向かって巨大な白い柱状構造物が接続している
何だろう？
・・・
靴と靴下？
・・・
まさか！そんなことあるはずがない！と心の中で打ち消していたところで、周囲の視界がさあっと暗くなると、急に船体に上向きのＧが加わった

＊＊＊＊＊

海に面したリリパットの街に、一艘の小船が接岸していた
いや、実際にはたくさんの船が停泊していたのだが、その一艘が群を抜いて大きかったので、ガリバー娘には一艘にしか見えなかったのだ
このくらいの大きさなら壊さずに拾い上げることができそう
形から判断してクルーズ船
中には大勢の乗客が乗り込んでいるに違いない
リリパットの人たちと間近でコンタクトできる絶好のチャンスだわ
しゃがみ込んだガリバー娘は、自分のローファーより一回り小さいその超大型クルーズシップを片手で鷲づかみにした
軽っ！
思っていたよりずっと軽い
まあ、考えてみれば船が重すぎたら沈んでしまうわけだが、それにしても150000 リリパット・トンは 36 ブロブディンナグ・グラム程度でしかない
見た感じはブロブディンナグのスイートポテトくらいの大きさだが、持ってみた重さはその 1/10 くらい
軽い軽い
とはいえこの小船はこの国では他を圧倒する巨大船舶のはずだ
それを片手でひょいだよ
・・・
ガリバー娘は自分の力を改めて噛みしめていた
もうね、この国の人たちにしてみたら、わたしってば奇跡の超大巨人よね
みんなが憧れと羨望の眼差しで自分を見上げてくれる様子が目に浮かんでくる
うーん
たまらん
早く実際のこびとたちのリアクションが見たい
ガリバー娘は立ち上がると、掴み上げた大型クルーズ船を手の上に置いて思いっきり顔を近づけた
うわあ
いるいる



小さな小さなリリパット人たちが大勢！
こうやって近くで見ると、みんなホントに可愛いわ
ついつい笑みがこぼれてしまう
でも、みんな急に持ち上げられて不安に思っているんじゃないかしら？
じゃあ、悪気がないことを示すために、まずはきっちりご挨拶しないとね
「みなさんこんにちは！わたしはガリバー娘です！みなさんよりちょっと身体が大きいみたいだけど、仲良くしましょ❤」

＊＊＊＊＊

超大型クルーズ船の乗客・乗務員たちは、もはやことの成り行きについて行けなかった
視界が暗くなって、船体に上向きのGが加わったと思ったら、今度は上空にとんでもなく巨大な少女の顔が現れ、そして至近距離から耳をつんざくような大音量で話しかけられたのだ

「みなさんこんにちは！わたしはガリバー娘です！みなさんよりちょっと身体が大きいみたいだけど、仲良くしましょ❤」

キラキラ輝く黒い湖のような瞳が、クルーズ船の甲板をきっちりロックオンしていた
ここでようやく乗客・乗務員たちは、このクルーズ船が超巨大少女に捕まえられて、今その手のひらにのせられていること理解した
ちょっと身体が大きいどころではない
見た感じの迫力や圧迫感がもの凄いだけでなく、発した言葉の音量と風圧だけでも、その場に立っていることができないレベルの威力だった
しかもここは高度2000リリパット・メートルを遙かに超える高地
リリパット島にこれよりも高い山はない
そんなところに急に引き上げられたのだから、もう気圧差で頭はクラクラ
乗客・乗務員たちは甲板から落とされないよう自分の身を守ることで精一杯だ
とても仲良くするどころの話ではなかったのである

＊＊＊＊＊

ガリバー娘も狼狽していた
どうやら甲板上で多くのリリパット人たちが倒れているようだ
こびとってホントに繊細なのね
ごめんね、悪気はなかったのよ
ことが大きくなる前に、ちゃんと港に戻しておこう
ガリバー娘は手の中の大型クルーズ船を、そっと足下の海面に置いた
これで大丈夫
そもそも多少怪我人が出たところで、リリパット人たちが大巨人のわたしを咎めることなんてできるとは思えないけど、好感度は下がっちゃうもんね
わたしはアイドル並みに人気絶大なでっか可愛い無敵のウルトラ大巨人少女、という路線で行きたいのよ

具合の悪くなる人が続出したらたいへん
でも、もう印象悪くしちゃったかなあ？
うーん
・・・
じゃあ人気回復のため、ちょっと過激にサービスしちゃおうか
「・・・みんな、わたしのパンツとか見上げて、えっちなこと考えてるんでしょ？いいわよ。ほら、サービスしてあげる❤」

＊＊＊＊＊

「みんな、わたしのパンツとか見上げて、えっちなこと考えてるんでしょ？いいわよ。ほら、サービスしてあげる❤」

超巨大少女は自分でスカートを捲り上げながらヒップを突き出して見せた
ものすごい光景だ
リリパットの誇るこの首府の高層ビル街が、全部まとめて一人の少女の股下に収められている
当の超巨大少女は、この破廉恥なポーズをしても恥ずかしがるそぶりもない
彼女から見たら、自分たちリリパット人は小さすぎて人間として認識されていないのだろう
悔しいが、それが現実だ
リリパット人たちが歯ぎしりしながらこの非現実的な光景を見上げていると、その背後からジャンボジェット機が飛来してきた
時刻から推定して、リリパット発ブレフスキュ行きのリリパット航空定期便である
危ない！
このままのコースを飛行し続けたら、あのそびえ立つ超巨大少女に衝突してしまう！

＊＊＊＊＊

すこぶるいい気分
アリさんより小さなこびとたちに、自分の巨大さを見せつける
声はよく聞こえないけど、みんなが驚いたり、慌てたりしているのは雰囲気でわかるわ
どう？
わたしの大きさがわかった？
ねえねえ、わたしってば、超巨大可愛いでしょ？
ウルトラ大巨人アイドルとして通用するんじゃね？
などと妄想を膨らませて悦に入りながら、しかしガリバー娘も背後からジャンボジェットが接近していることには気づいていた
ちょっとまずいかな
衝突したら大事故になってしまう
・・・

でも、わざわざ避ける必要もなさそうね
ガリバー娘は両手でセーラー服のスカートをたくし上げた
「はい、どーぞ💛」
その声に応えてかどうかは定かでないが、ジャンボジェット機はたくし上げたスカートの下をくぐって無事に通過していった
おおおおおおおおおおおお
足元からリリパット人たちのどよめきが聞こえる
だよね
ねえねえ、すごくない？
わたしってば、ただの女子高生なのに、この国では空飛ぶジャンボジェットを股下くぐらせちゃうくらいの超大巨人なんだよ
ほらほら、みんな見て、わたしの巨大さ
・・・
すっごい優越感！
・・・
あれ？
・・・
気持ちよくって、なんだか股間がじんわり熱くなってきちゃった
こんなの初めてだ

＊＊＊＊＊

「はい、どーぞ💛」

おおおおおおおおおおおおお
市民たちはどよめきを上げながら超巨大少女の振る舞いを見上げていた
ジャンボジェットがその股の下をくぐって飛行していく
飛行中の旅客機が普通に股下をくぐっていくのだ
なんという巨大さ
普通の女子高生に見える容姿で、サイズだけが非現実的に周囲から浮き上がっている
しかもその圧倒的な巨体を、超巨大少女は足下のリリパット市民たちに向かって満面の笑みで見せつけている
自分が大巨人であることが嬉しくてたまらないのだ
「あ！」
見上げる上空の真っ白なパンツに、うっすらと液体が滲みだしてきた
臭う
染み出してきた液体から、うっすらと酸っぱ生臭くえっちな臭いが湧き起こり、霧となって周囲一帯に立ち込めてくる
間違いない

あれはマン汁だ
この超巨大娘は、自分の巨大さを足元の我々に見せつけ、優越感に浸り、驚いたり畏れたり悔しがったりする我々リリパット人を嘲り笑って、そこに性的快感を覚えているのだ
なんという変態
なんという変態巨大娘
だが、この小娘のはしたない変態ぶりを叱りつけることなど不可能
だって小娘どころか超ウルトラ巨大娘だ
大きすぎる
小さな我々は歯ぎしりしながらその痴態を見上げるしかない
・・・
・・・

＊＊＊＊＊

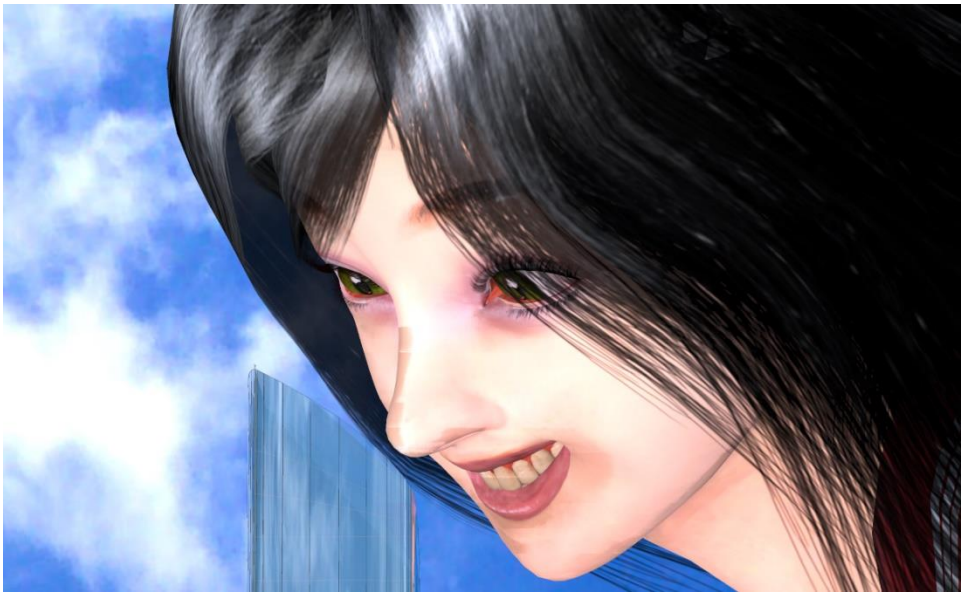
しかしながら、全てのリリパット人たちが悔しがっていたわけではなかった
リリパットの超高層ビル群でも一つ抜き出て高いリリパットタワービールの頂上に立って、あの総理大臣の懐刀である首相補佐官は絶句していた
襲来してきた超巨大娘の股間から、マン汁が滲み出ている
自分の巨大さを我々リリパット人に見せつけることで、性的興奮を覚えている
なんと
・・・
総理の読み通りではないか
・・・
「・・・身体が巨大とはいえ中身は経験の乏しいただの小娘だ。自分の置かれた状況に舞い上がり、優越感のあまり、おそらく性的快感を覚えるだろう。そうなれば理性的判断力は落ちる。交渉で付け入る隙が出てくるはずだ・・・」
・・・
この若い補佐官にとって、総理大臣は政治の師匠であり、人生の目標でもあった
それほどに尊敬する総理大臣の策謀ではあったが、今回ばかりはまさか奏功するとは思えなかった
改めて恐るべき洞察力
いける
これなら確かに行ける
補佐官は小さく肯くと、手にしたハンドマイクのボリュームを最大にして声を上げた
「・・・人間山女さん、人間山女さん、応答してください。わたしはリリパット王国政府の首相補佐官です。今日はリリパット王国政府を代表して貴女とお話しするためにここに参りました」

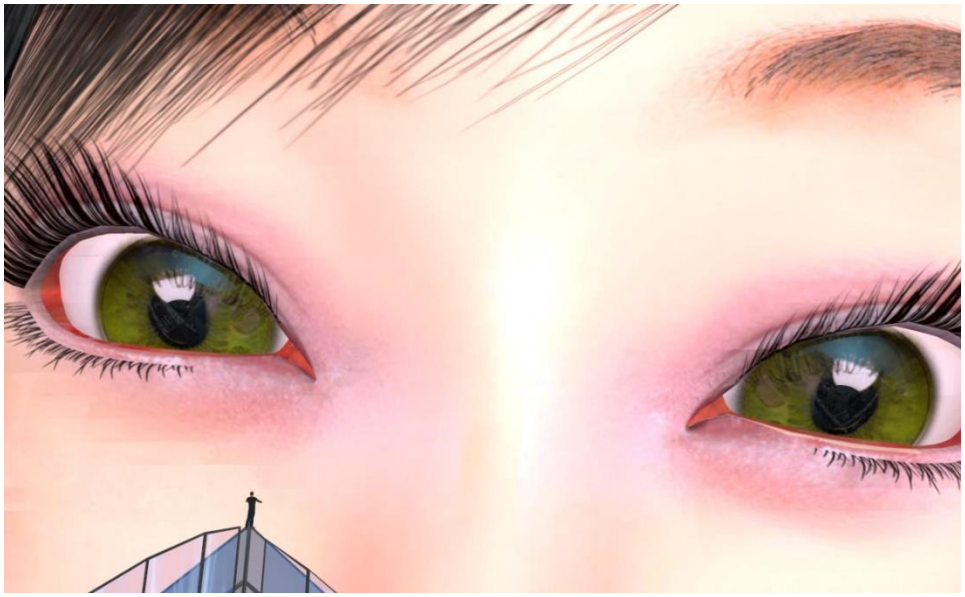
＊＊＊＊＊

「・・・人間山女さん、人間山女さん、応答してください。わたしはリリパット王国政府の首相補佐官です。今日はリリパット王国政府を代表して貴女とお話しするためにここに参りました」
・・・
・・・

あれ？
このビルの屋上にいる人が発した言葉
・・・
わかる
・・・
これはエゲレス語だ
レミュエル・ガリバーの大ファンだったガリバー娘は、ブロブディンナグにいたころからその言葉を知っていた
いや、この航海に出るにあたってエゲレス国を訪問することが最終目標だったのだから、この半年くらいは特に集中してエゲレス語を勉強していた
こんなところで役に立つのだから、勉強しといてよかったわ
「リリパット王国の首相補佐官さん、初めまして。わたしはブロブディンナグ国からやってきた女子高生です。ガリバー娘と呼んでください。可愛くないからその『人間山女』っていう呼び方はやめて！」

＊＊＊＊＊





「リリパット王国の首相補佐官さん、初めまして。わたしはブロブディンナグ国からやってきた女子高生です。ガリバー娘と呼んでください。可愛くないからその『人間山女』っていう呼び方はやめて！」

「了解、それではこれからはガリバー娘さんと呼びましょう、人間山女さん」

「どう了解したのよっ！」

などと超巨大少女の発する大音声と吐息の風圧に耐えつつたわいない会話をしながら、またしても首相補佐官は自らが仕える総理の慧眼に舌を巻いていた
リリパットにとって安全保障上の脅威となるエゲレス国の言語は、政府のインテリジェンスに深く関与してきた補佐官にとって当たり前の教養だった
ところが、総理はこれが明らかにエゲレス人ではない超巨大少女とのコミュニケーションにも使えると喝破して、エゲレス語でコンタクトを試みるよう補佐官に指示したのだ
底知れない知謀である
「というわけで人間山女さん、リリパット王国は貴女をわが国への訪問者として歓迎いたします」

「ありがとう、でも人間山女じゃなくてガリバー娘ね」

「おっと失礼」

会話をしているうちに、極度の緊張状態にあった首相補佐官も、少しずつ心にゆとりが生まれてきた
改めて目の前のこの超巨大少女を見る
高さ 900 リリパット・メートルのリリパットタワービルの頂上に立ちながら、でも四つん這い状態の超巨大少女の顔をまだ見上げなければならない
圧倒的な巨大さである
ヘリコプターから遠景で眺めたときは、巨大だけれどグラビアアイドル級の容姿に恵まれた美少女だな、と認識することができた
だが、この近距離では無理
顔ですら全体ではなくパーツしか認識することができない
目である
虹彩だけで直径が 20 リリパット・メートルはありそうな瞳が、キラキラと輝きながら、自分に向かって焦点を絞っている
それはすくみ上がるほどに恐ろしい状況であるはずなのだが、ところが恐怖感が一周回って自分でも不思議なほど冷静にこのシチュエーションを楽しめるようになってきた
パーツしか認識できないこの超巨大少女を、むしろ可愛いとすら思えるようになってきた
いや、可愛いという言葉では言い尽くしきれないほど魅力的だ
むしろいつまでもこうやって至近距離で会話を続けていたい
・・・
首相補佐官は先日 30 歳になったばかり
若いといってしまえばそこまでだが、それにしてもこの二人のサイズ差を考えればその度胸はたいしたものである
さすがは総理大臣が目にかけている次代のホープであるといえよう

「・・・で、補佐官さん」

「は、はい！」
おっといけない、余計なことを考えていた
いまはこの危険な超巨大少女との交渉に専念しなくては
「何かご不明の点でも？」

「このリリパットに、むかしレミュエル・ガリバー様という名前のこびとが・・・」

「レミュエル・ガリバーですか、ええ、ええ、知っていますよ」
首相補佐官は即答した
「数百年前、嵐のためにここリリパットの海岸に漂流してきた伝説の巨人レミュエル・ガリバーは、ここリリパット王国では今も歴史の教科書に載っている一大有名人物です」

「伝説の・・・巨人？」

そうか
このリリパットの人たちにしてみたら、あの小っちゃなこびとのレミュエル・ガリバー様が伝説の巨人になっちゃうんだ
ぷふふ
ガリバー娘は意味ありげに笑みを浮かべながら、懐からあのレミュエル・ガリバー様のお人形を取り出した

「レミュエル・ガリバー様は、その後にわたしの故郷ブロブディンナグ半島を訪れて、たいへんな人気者になったのよ。はい、これがそのレミュエル・ガリバー様の等身大のお人形。わたしの大切な宝物なの」

ガリバー娘はレミュエル・ガリバーのお人形を手の上にのせて、どや顔で補佐官に見せびらかす

肚が据わってきたはずの首相補佐官もさすがに腰が抜けた
このお人形がどこまで写実的にレミュエル・ガリバーの姿を再現しているのかはわからない
ただ、わざわざ等身大だと断っているのなら、大きさに関してはその通りなのだろう
実際に、リリパットで語り継がれてきた「身長72リリパット・メートルの大巨人」という伝承にほぼ合致している
問題は、それがこの人間山女の手のひらの上にちょこんと載せられているという事実だった
・・・
開いた口が塞がらなかった
動揺した首相補佐官が何も話せないうちに、ガリバー娘が言葉をつづけた

「ねえねえねえ、その時レミュエル・ガリバー様はリリパット人たちに自分の股下を行進させた、っていうことなんだけど、それってホントの話？」

「・・・あ、ああ確かに、そういう言い伝えはありますね」
これに関しては言い伝えだけでなくしっかりと記録まで残されている
大巨人のレミュエル・ガリバーがこの都の大通りで仁王立ちして、その下をリリパット軍の兵隊たちが粛々と行進し、当時の国王陛下は大変にお慶びになったのだそうな
首相補佐官にしてみれば、そんなこともあったのかね？程度の知識であったが、ガリバー娘はなぜか目をキラキラさせながら身を乗り出してきた

「見たい！」

「は？」

「見たい！見たい！わたしの宝物のレミュエル・ガリバー様の股下を、リリパットの人たちが行進するところがみたいわ！」

「・・・」
もちろん気乗りのする話ではない
だが、リリパット王国政府から人間山女との交渉を一任されている立場の首相補佐官が、そのリクエストを無碍に断れるはずもなかった

＊＊＊＊＊

いま、目の前に巨大な人物が仁王立ちしている
伝説の巨人レミュエル・ガリバーの像である
雲を突くような大男、という言い伝えどおりの堂々たる巨体である
その足元に、リリパット軍から選りすぐられた精鋭たちが集結した
これから、あの大男の股下を潜って行進していくのである
まあ、なかなかに屈辱的なミッションであるが、しかし数百年前のリリパット軍兵士たちも同様なことをしたのだそうだからそれはまあ良い
問題は、その大男が立っているロケーションである
手のひらの上だ

この薄ピンク色の柔らかくて暖かい平原は、大男よりも遥かに巨大な人間山女の手のひらの上なのだ
その証拠に、大男の股下を行進している我々の姿を、更にその斜め上空からバカバカしいほど巨大な少女の顔がのぞき込んでいる
あれが人間山女、いや、人間山少女だ
何という巨大さなのだろう
我々にとっての伝説の巨人レミュエル・ガリバーを、玩具のようにちょこんと手のひらにのせている
いや玩具のようにではない、実際に玩具なのだ
我々リリパット人は、あの少女にとって小さな玩具でしかないこの像をあたかも巨人であるかのように足下から見上げているのだ

では我々リリパット人は、あの人間山少女から見ればどのような存在なのだろうか？
湧き上がってくる屈辱感を無理矢理心の奥底に封じ込め、兵士たちは淡々と行進する
だが当の人間山少女・ガリバー娘は容赦なかった

「うわあああ、小っちゃい小っちゃい、リリパットの兵隊さん、本当に小っちゃくてアリさんみたいよ！可愛い❤これではわたしのレミュエル・ガリバー様が、まるで巨人みたいに見えちゃうわけよね！」

ガリバー娘は自分の空いている方の手を見た

「そうだ！」

その手でＶサインを作り、逆さにして手のひらに突き立てる
このたった２本の指で、伝説の巨人レミュエル・ガリバーの等身大人形より更に一回り巨大なアーチの完成だ

「はい、みなさん、巨人がもう一人参加ですよ。この巨人はわたしの指で～す。てへへ、どう？大きいでしょ？指だけでも巨人みたいでしょ？」

調子に乗ったガリバー娘の悪ふざけであったが、しかしリリパット軍兵士たちには確かにその指二本が大巨人に見えたことは事実だった
自分の手のひらの上で慌てふためくリリパット人兵士たちを見下ろして、ガリバー娘は有頂天になった
この島での自分は、夢にまで見たエゲレスを訪問した自分の姿より、更に圧倒的に巨大になった
まさに無敵の超ウルトラ大巨人
ぷふふ
さあて、この巨大な身体で、これから何をしようかな？

＊＊＊＊＊

悪ふざけが過ぎたようにも見えるが、ともあれこの超巨大少女がご機嫌になったことは間違いない
首相補佐官は頃合いをみてガリバー娘に話しかけた
「人間山女さん、長旅でさぞやお疲れであったことでしょう、どうぞ衣服を緩めてお楽になさってください」

「い、衣服を・・・緩める？」

「歓迎のサービスをご用意してございます。さあ、その上着を捲り上げて、さあ、さあ」
ガリバー娘は、補佐官の勢いに押されてセーラー服のトップを捲り上げた
たわわな乳房がぽろりである
言葉巧みに唆された、というよりも、こうやってこびとの国で自分一人だけ超大巨人でいると、なんだか羞恥心のハードルがおかしくなってくるのだ
どうせ見上げているのはアリさんより小さなリリパット人ばかり、と思うと、はしたないことをしても恥ずかしいという気持ちにならない
それよりも
・・・
歓迎のサービスって、何？

＊＊＊＊＊

市民たちは遙か上空で繰り広げられる意外な展開についていけなくなっていた
セーラー服を身にまとった超巨大な美少女が現れて、高層ビル街を跨ぎ越して自分の巨大さをアピールしたと思ったら、マン汁でパンツを濡らして恍惚の表情を示し、かと思ったらリリパットタワービルの頂上にいる誰かと話し込んだ末に、自らセーラー服を捲り上げて衆目の集まる前で恥ずかしげもなく超巨大なおっぱいぷるんぷるんである
いや、地上から見上げる市民たちにとってそれ自体は結構なことではあるのだが、それにしてもこいつは変態か？
変態超巨大娘か？
いや、変態であるにしても、なんで自ら率先して恥ずかしいことをおっぱじめるのか？
それは変態だから自ら率先して恥ずかしいことを始めるのは当たり前、というツッコミの声もかき消されるほど謎が謎を呼ぶ中、今度はリリパット空軍のヘリコプター部隊がどこからともなくわらわらと集まってきた
「？」

＊＊＊＊＊

ぱたぱたぱたぱたぱたぱたぱたぱた
リリパット空軍の精鋭部隊がターゲットに向かって続々と集結していた
目指すはあの双子山
リリパットに来襲した超巨大少女の乳房だ
いま、自らぺろんとむき出しにしてくれた
受容れ準備 OK ということだ
それにしてもでかい
ふっくら、丸くて、柔らかそうで、ちょっといい匂いも漂っていて、それでいてどっかーん
まさに双子山
そんなものが目の前に突き出されている
もう、たまらん

据え膳食わぬは漢の、という問題ではない
リリパットの運命は彼らの双肩にかかっているのだ
「・・・行くぞ」
「おおおおおおお！！！」
精鋭部隊は一気に襲いかかった

＊＊＊＊＊

いつの間にか胸の周りにヘリコプターがわらと集まってきたと思ったら、中からパラシュートやロープなどを使って兵士たちが一斉に飛び出してきた
傍目にもわかるばりばりの戦闘意欲である
一般市民とは異なり厳しいトレーニングを積んできたプロの彼らは、巨大美少女がえっちな肢体を曝け出していたところでまるで動じない
もちろん多少股間が膨らむくらいのことはあったが、お構いなしに兵士たちは躍りかかってきた
両乳首である

「・・・あ」

いるのかいないのかわからないほど小さな兵士たちだが、敏感なところを攻撃されればそれは感じてしまう

「あ、あ、あ・・・」

なにしろターゲットが大きいので兵士たちも暴れがいがある
殴る
蹴る
体当たりする
挙げ句の果てには手にした銃で撃つ
そこまでされても４階建てビルサイズの乳首はびくともしない
それどころかむしろ適度な刺激がガリバー娘には快感となって襲いかかった

「あ、あ、あああああ」

むくむくむくむく
「おお！！！」
攻撃していたターゲットが更に大きくなってきた
４階建てビルのはずが、徐々に８階建てビルほどに巨大化してきたのだ
勃起だ
乳首が勃起したのだ
「ほほお」
「感じてるな」
「よし」
「まだまだ、行くぞ！」
リリパット空軍の精鋭兵士たちは戦意を一層高揚させ、更に巨大になったターゲットに対して攻撃を続けた

＊＊＊＊＊

「あ、あ、ああああああ」
何なのこれ？

どういうつもりなの？
アリさんより小さなこびとたちが、乳首に群がって、ちくちくと刺激してくる
なんて繊細なの
なんて心地よいの！
今まで経験したことがないいい気持ち
でも、さすがにちょっと力強さは足りないかな

ガリバー娘はリリパット軍兵士たちに両乳首を攻撃させたまま、自らの両手でむき出しの乳房を揉み始めた
「あああああああああああああ」

＊＊＊＊＊

リリパットタワービルの頂上では、大統領補佐官が双眼鏡越しにリリパット空軍兵士たちの奮戦ぶりを観察していた

「あああああああああああああ」

感じてる感じてる
上々な戦況だ
彼らは期待以上によくやっている
だがガリバー娘がたまらず自分で乳房を揉み出したので、乳首の上の彼らは足場が大揺れで危険になった
よし、次のステップだ
「人間山女さん、人間山女さん！」
声をかけられてガリバー娘は我に返った

「・・・な、何かしら？」

「そろそろいい感じになってきたんじゃありませんか？」

「いい感じ？」

「股間ですよ、まんこがうずいてきたでしょ？」

「！」

なんてはしたない！
清純な乙女に向かってなんてこというの！
・・・
と、クレームをつけることはできなかった
確かにうずうずしている
もともとさっきからまんこは熱くて濡れ濡れ、リリパット人たちに自分の巨大さを見せつけて優越感でマン汁漏れ出し放題であったのだが、調子に乗って剥き出し乳房を自分で揉んでいるうちに、まんこがいよいようずうずしてきてしまったのだ
解説しよう
まんこがうずうずしてきたのには他にもしっかり理由があった
乳首を攻撃した空軍はあくまでも陽動部隊
注意がそちらに向いているうちに、実は主力の陸軍師団が密かに大股開いて座り込んだガリバー娘の股間に忍び寄り、ズブズブに濡れたパンティーの繊維の隙間を潜り抜けて敵の本陣に総攻撃をかけていたのだ

絶壁のようにそそり立つ巨大なパンティーの繊維を足場にして、兵士たちはずんずん登り詰め、そして内部に侵入し、そこで各々が果敢に攻撃を加える
この僅かな刺激が積み重なって確かな快感になり、いよいよマン汁が噴き出してくるが、その奔流に抗いながら、つんと鼻を突くきつめの淫臭に身を委ね、勇敢な兵士たちはガリバー娘を襲い続ける

「あ、あ、あ、あ・・・」

確かに快感だ
これがまんこの疼きの原因だったのだ
だが、同時に
・・・
物足りない
・・・
むずむずするけど、決定打に欠ける
欲しい
ここまできたら欲しい
・・・
まんこの中に
一発
ずぼっと
・・・
・・・
「・・・挿れますか？」

「え？」

首相補佐官はここぞとばかりに問いかけた
「いま、私の立ってるこのリリパットタワービル、あなたのその濡れ濡れのまんこの中に、ずぶっと、挿れてみませんか？」

「！」

さすがのガリバー娘も耳たぶまで紅くなった
・・・
でも、リリパット人たちには、もう今までに十分に痴態を見せている
全然
恥ずかしくない
・・・
彼女の名誉のために言っておけば、ガリバー娘はブロブディンナグでは決して変態などではなかった
清楚で可憐な女子高生
もちろんえっちなことに興味はあるけど、だからといって人前で曝け出しにするなんてとんでもない
でも
・・・
いまは違う
彼女はどこにでもいる普通の女子高生ではない
大きな山も一跨ぎの超ウルトラ巨大娘なのだ
足元から見上げるこびとたちはどうやっても手が届かない圧倒的な大巨人なのだ
相対的な身体の大きさに比例して、気も大きくなった
さっきから何回も説明したように、巨人になると羞恥心とか罪悪感とかがぶっ飛んでしまうのだ

はしたない姿を見せたって、どうということもない
むしろ、それを堂々と見せつけられるところが大巨人の特権じゃないの
見せてやる
見せつけてやる
とことんえっちで破廉恥で背徳的な姿を見せつけてやるわ
ガリバー娘はにっこり笑って肯いた

「・・・うん、挿れる❤」

＊＊＊＊＊

超巨大なガリバー娘が立ち上がり、スカート、そしてパンティーを脱ぎ始めたところで、攻撃部隊は一斉に撤収を始めたパラシュートでその場から脱出するのだが、なにしろ地表までは優に 1000 リリパット・メートル以上ある
この目もくらむような高さをものともせず、兵士たちは冷静かつ迅速に撤収を完了した
さすがはプロの戦士たちである
一方、リリパットタワービルの頂上に陣取った総理大臣補佐官も急いで撤収しなければならなかったが、こちらはリリパット軍のヘリコプターが救援に訪れることになっていた
ところが気が急いているにも関わらず、なかなかヘリコプターは姿を見せない
そうこうしているうちに、補佐官の上空にものすごい光景が現れた
「！！！」

＊＊＊＊＊

据え膳食わぬは男の恥
そういうけどね、女の子にしたって恥は恥よ
だから用意してもらったものは遠慮なくいただくことにするわね
それじゃあ、ちょっと失礼して
するり
スカートを脱いだ
おおおおおおおおおおおおおおお
足元から小さなどよめきの声が上がる
えへへ
慌てない慌てない
お楽しみはこれからよ
するする
ぽん
今度はパンティーを脱ぎ捨てた
下半身はすっぽんぽん
ほらほらほら、これを待ってたんでしょ
女子高生のまんこもろだしだよ
おおおおおおおおおおおおおおお
足元からさっきより 1 オクターブ高いどよめきが起こる
それはそうよね
みんな、見たかったんでしょ？

わたしも見せつけたかったよ
これが巨人まんこ
キミたちこびとが何万人集まっても満足させられないウルトラ巨大サイズのまんこ
くふふ、でっかいでしょ？
はい、ぐっぱー
おおおおおおおおおおおおおおおお
超巨大ガリバー娘は下半身すっぽんぽんの状態でリリパットの誇る高層建造物リリパットタワービルを跨ぎ越した
ぼたん
ぼたん
ぱっくり開いた天空の超巨大まんこからリリパットタワービルに向かって強烈な淫臭を放つ粘性の高い液体が滴り落ちてくる
あはは、マン汁がだくだくに垂れてきちゃった
もう我慢ができないよ
「じゃあ、いただきまあああああああす！」
超巨大ガリバー娘はゆっくりと腰を落とした

＊＊＊＊＊

「じゃあ、いただきまあああああああす！」

え？
・・・
ちょ、待てよ！
リリパットタワービルの頂上に残された首相補佐官は天を仰いで絶句した
超巨大なまんこが降りてくる
酸っぱなま臭いマン汁を滝のように滴り落としながら、
ばっくりと大きな口を開いて降りてくる
このリリパットタワービルを、彼もろとも一口で呑みこもうとしているのだ
・・・
予想を超えるスピードだ
これでは救援が間に合わない
・・・
さすがに冷静な補佐官も観念した
ダメか
万事休す
・・・
・・・
と肩を落としたところに、リリパット軍のヘリコプターが現れた
「補佐官、急いで！」
「ああ、有難い」
着陸している時間はない
ヘリコプターから放り投げられたロープに飛びつくと、
後は必死にしがみつくだけ

「少々荒い運転をしますよ」
ヘリコプターは急旋回しながらリリパットタワービルから飛び去る
ロープにしがみつく補佐官は生きた心地がしない
だが、ふと振り返った光景を見て
・・・
それでも自分が生きている僥倖を実感した
たった今まで自分が立っていたリリパットタワービルの頂上は、既に超巨大ガリバー娘のまんこの奥深くにずっぽりと挿入されていた

＊＊＊＊＊

「あああ、ああ」
ずっぽ
ずっぽ
「あ、あああ、あ、あ」
期待以上の快感だ
もちろん、まんこにはじめてしっかりした挿入感が得られたからだ
・・・
でも、それだけではない
ずっぽ
ずっぽ
これはこの国で一番の超高層建築だ
国の象徴
国民の誇り
だけど、わたしにとってはただのちんぽでしかない
ずっぽ
ずっぽ
どう？
どんな気持ち？
こんな巨大なタワービルを女の子のえっちな玩具にされちゃって
でも仕方ないよね
わたしはこんなに大きな巨人の女の子なんだから
あなたたちアリンコ人間がどうこういえることじゃないわ
ちんぽにしちゃったリリパットタワービルだけじゃなく、この国自体がもうわたしの玩具なのよ
あなたたち自身も含めてね
ずっぽ
ずっぽ
あはは
みんな、悔しいかな？
悔しいでしょ？
でも何もできないでしょ？
そんな小さなこびとじゃね

残念でした
わたしはすっごく気分がいいよ
だって無敵の超大巨人だもん
なんでもできるウルトラ大巨人の女の子なんだもん
あはははは
あはははははははは
あはははははははははははは
ずっぽ
ずっぽ
ずっぽ
・・・
・・・

＊＊＊＊＊

なかなかのワイルドな一人えっちだった
しかも何万人単位でギャラリーが見上げていたから満足感マシマシ
ふうう
その分、さすがにくたびれちゃったわ
・・・
ぱたぱたぱたぱた
ヘリコプターが飛来してきた
「・・・いかがでしたか、人間山女さん？」
さっきの首相補佐官の声だ
命からがら脱出したというのに、もう仕事をしている
タフだなあ
こっちはもう面倒くさいから「人間山女」という呼び方を訂正する気もなくなっちゃったわ

「う、うん、良かったわよ」

さすがにちょっとばつが悪いので目を泳がせながら斜めの方向に答える
まともに話しかけると風圧で吹っ飛ばしちゃうかもしれないしね
「お気に召していただければ光栄です」
そこでヘリコプターから話しかける声が変わった
「ガリバー娘さん、初めまして。私はこのリリパット国の総理大臣です」
なんと、この国のトップの登場だ
さすがにガリバー娘も少したたずまいを糺した
向き直って、慎重に声のトーンを落としながら挨拶する

「は、初めまして、ガリバー娘です」

「リリパット国はあなたを歓迎します、ガリバー娘さん。宜しければ、あのようなおもてなしは今後何回でも企画いたしましょう」

「ありがとうございます」

「その代わりといっては何ですが・・・こちらからあなたにお願いしたいことがあるのです」
お願い？

何かしら？
「実は、いまこのリリパット国は安全保障上の危機に瀕しています。隣国ブレフスキュです」

「！」

「このままではわがリリパットはブレフスキュによる侵略によって蹂躙されてしまう。罪もない多くの国民の命と自由が奪われてしまうのです。そうなる前に・・・」

「わたしがそのブレフスキュを懲らしめに行けばいいのね？」

ガリバー娘の表情がぱっと明るくなった

「そんなのお安い御用よ」

安全保障上の脅威って、たいそうなこと言ってるけど、でもブレフスキュだってどうせこびとの国なんでしょ？
確かあのこびとのレミュエル・ガリバー様ですら無双できちゃったって話だし、ならもっと大きなわたしなら、難なく退治できちゃうはずだわ
それにね
・・・
・・・
実はやってみたかったの！
こびとの国で無敵の巨人として大暴れ
こびとの軍隊が本気で攻撃してくるのを余裕で弾き返し、逃げ回る戦車や兵隊たちを高らかに笑いながら無慈悲に踏み潰していく
このリリパットでは何だか成り行き上そういう展開にはなれなかったけど、悪い奴が相手なら話は別
可哀想なリリパットを守るための正義の大巨人美少女として思いっきり暴れられるじゃない

「それなら、善は急げ」

ガリバー娘はその場でするすると衣服を脱ぐと、すっぽんぽんの丸裸になった
さすがの総理大臣も意表を突かれて言葉に詰まる
「ガ、ガリバー娘さん、そ、それは・・・」

「着替えをあまり持ってきていないのよ。服が汚れたら嫌だから脱いでいくわ」

もちろんこれはまたしても巨人になったガリバー娘のいかれた羞恥心のなせる業ではあったのだが、それに加えてブレフスキュ軍から素肌を攻撃されてもかすり傷一つ負うはずがない、という自信の現われでもあった

「じゃあ、ちょっと行ってきます。バイバーイ！」

全裸のガリバー娘は振り返って手を振ると、遥か 800 リリパット・キロメートル先の隣国ブレフスキュに向かって、ずんずんと海を渡って歩いていったのである

＊＊＊＊＊

「総理、見事なお手並みでした」
「まあね、交渉はギブ・アンド・テイクさ。こちらが望む安全保障を得るために、あの大巨人の欲求を満たしてやったというだけのこと。身体は巨大だが、中身はただの小娘だ。何を欲しているかなど、経験豊かな大人の目には手に取るようにわかる。つまり、あの超巨大娘を、こちらの掌の上で踊らせてやったということさ、あっはっは」

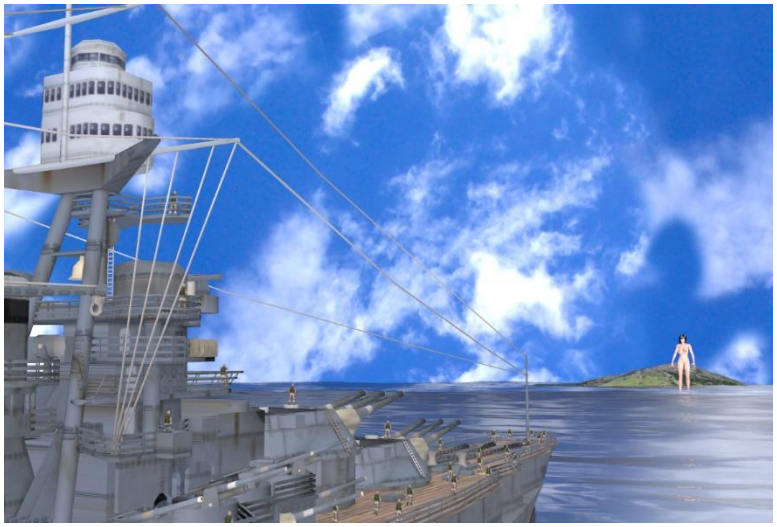
「・・・しかし総理、リリパット国は、これからずっとあの超巨大娘のご機嫌取りをしていかなければならないのですか？」
「そんな必要はない。見たかね？あの超巨大娘が乗ってきた船を」
「あ、いや・・・」
「食料と水が備蓄してある。賢明な判断だ。リリパットとブレフスキュを合わせてもあの巨大な胃袋を満たす食事を提供することは不可能だ」
「なるほど」
「しかし量に限界がある。あれでは１週間も持たせることはできまい」
「ということは」
「あの超巨大娘は１週間以内に自分の国に戻るはずだ。つまり、この１週間、あのでか娘に媚びを売ってやるだけで、このリリパット国はブレフスキュという安全保障上の脅威を取り払うことが可能になるのだよ」
「・・・」
相変わらずキレキレの読みだ
しかし自分の国に帰った超巨大娘が、またすぐリリパットに戻ってくる可能性についてはどう考えているのだろう？

そうなれば、結局この国はあの超巨大娘に隷属することになってしまわないか？
もしかして
その可能性を想定してない？
・・・
・・・
いやいや、わからないことを詮索しても仕方ない
またあの超巨大娘が戻ってきたら、その時はその時だ
・・・
戻ってきて
・・・
ほしいな
・・・
・・・
・・・
あれ？
・・・
ブレフスキュに向かって去って行くガリバー娘の巨大な後ろ姿を眺めながら、全く意外な希望を抱いてしまったことに自分でも驚く首相補佐官であった

＊＊＊＊＊

リリパット王国に超巨大娘が現れたという情報は、リアルタイムでブレフスキュ共和国にも伝わった
ブレフスキュはリリパットへの侵攻を目論んでいたので、情報収集に抜かりはなかったのである
そしてブレフスキュ海軍には、伝説の巨人レミュエル・ガリバーに壊滅させられたというトラウマがあった
軍艦を港に集結させていたら、現れた巨人レミュエル・ガリバーにまとめて鹵獲されてしまったのである
これを教訓として、巨人が現れた際には、海軍は港に留まらず洋上で迎え撃つようマニュアルで定められていた
基本的に遠浅の海が続くリリパット・ブレフスキュ間だが、それでもその中間点辺りは水深が 10 メートルほどになる
あの伝説の巨人レミュエル・ガリバーもそこでは背が立たず、泳いで渡ったとされている
そこを戦場に定めれば良いのだ
そこならいかに巨人といえども泳ぐことに精一杯

そんなアップアップの相手を艦砲射撃で蜂の巣にしてやれば勝利は間違いない
勝てる
というわけで、諜報部隊からリリパットに超巨大娘来襲のニュースを受けるや否やブレフスキュ海軍は出撃し、いちばん水深の深い地点で巨人を待ち伏せしていたのである



双眼鏡を覗き込んでいた提督は大きく肯く
遙か遠くに視認できるリリパット島に、その超巨大娘と思われる少女の姿が確認できた
ところが、なんと恥ずかしげもなく全裸である
提督は激怒した
わがブレフスキュ海軍を恐れていないのか
なめられたものだな
その全裸の美少女が、歩いてこちらに向かってくる
迎撃態勢を整えたこの船団に向かってまっすぐ歩いてくる
まさに思惑通り罠にかかりに来てくれたではないか
さっきまで激怒していた提督は、今度はにんまりと笑みを浮かべた
しめしめ、飛んで火に入る夏の虫だ
それでは目にもの見せてくれよう
・・・
と、思っていたが、どうもおかしい
超巨大娘の身体を浸す海面の水位が、いつまでたっても上がってこないのだ
足背が水面に隠れるかどうかというくらいで、そのままずんずん近づいてくる
近づくにつれ、その姿がぐんぐん大きくなる
ぐんぐんぐんぐん大きくなる
ぐんぐんぐんぐんぐんぐん大きくなる
だというのに、いつまでたっても水位が上がらない
せいぜい踝を浸し
臑の下まで水面下に消え
・・・
もしや
・・・
「・・・こ、こいつは、レミュエル・ガリバーどころではない、超絶メガサイズの大巨人なのでは？」
と、水兵たちが疑念を抱いたときにはもう遅かった
全裸の超巨大娘は足を止め、臑から上を海面上に曝け出した状態で、ブレフスキュの誇る海軍船団の遙か真上の上空に悠然とそそり立っていたのである

＊＊＊＊＊

リリパットからブレフスキュまで約 800 リリパット・キロメートル
これでは換算すれば 500 ブロブディンナグ・メートルだ
ブロブディンナグ人のわたしにしてみれば、ゆっくり歩いても数分
その間はずっとサンゴ礁に囲まれた波のない浅い内海が続いている
間もなく中間点に達するけど、おそらく水深が一番深いと思われるこのあたりでも海面はわたしの臑を浸す程度
でもこのくらいの深さだとこびとのレミュエル・ガリバー様は背が立たなかったはずなので、泳いで渡ったのかな？
もちろんわたしには全然必要ないことだけどね
などと考えていると、船団に遭遇した

危ない危ない
足下にいて目立たなかったので、気づかずに踏みつぶしてしまったり、起こした波で転覆させたりしてしまうところだったわ
いちおう警告だけしておこう
「通りますよ、危ないからどいてね💛」
無駄に害を及ぼしたりしたくないもんね
さ、早く逃げてね
・・・
と、思っていたのに逃げる気配がない
それどころか、ちかちかと可愛らしい砲撃を開始してきた
「？」
面食らうガリバー娘に向かって、フラッグシップと思われる戦艦から大音声が轟いた
「未確認人間山女よ、我々は無敵のブレフスキュ共和国海軍だ。わが国への不法な侵入を企てる者は、実力で排除する。覚悟しろ！」

＊＊＊＊＊

「通りますよ、危ないからどいてね💛」

海の上にそそり立つ全裸の超巨大少女が言い放った
遥か2000リリパット・メートル以上の上空から発せられた音声だが、甲板上の水兵たちがそれだけで頭を抱えてのたうち回るほどの大音量である
こんなの、太刀打ちできるはずがない
幸い、あの「通りますよ、危ないからどいてね💛」という言葉の意味は、超巨大少女が通過する邪魔をせずにこの場を退去すれば自分たちは見逃してもらえるということだろう
くわばらくわばら
それなら一刻も早くここからの退去を
・・・
と、全乗組員が望んでいた中で、一人だけ考えの違う男がいた
提督である
この誇り高いブレフスキュ海軍に向かって、どけ、とは何事か！
おこがましい！
頭に血の上った提督は、即座に全艦に砲撃の開始を命令した
そして奪い取るようにマイクを握ると、フラッグシップの艦橋から超巨大娘に対抗するかのような大音量で叫んだ
「未確認人間山女よ、我々は無敵のブレフスキュ共和国海軍だ。わが国への不法な侵入を企てる者は、実力で排除する。覚悟しろ！」

＊＊＊＊＊

「・・・我々は無敵のブレフスキュ共和国海軍だ・・・」
ブレフスキュ共和国海軍？
そうか、これがこれからわたしが懲らしめに行くブレフスキュの軍隊なのか
なら、探す手間が省けたし、気を遣う必要もないってことね
ガリバー娘はその場で四つん這いになって、至近距離からブレフスキュ海軍の艦隊を見下ろした
ぷふふ

小っさ
玩具みたい
何艘もいる船は、大きいのでも長さ 20 ブロブディンナグ・センチメートルもないかもね
片手で軽く掴めちゃうくらい
これでも彼らにしてみたら 300 リリパット・メートルを超える時代遅れの超弩級戦艦なんでしょ
甲板には小さな小さな水兵さんたちがうじゃうじゃいるし
あーあ、こびとって、とことん惨め
で、こんなに小さいくせに、わたしに攻撃しようとかっていうの？
マジぃ？
それじゃ早速、懲らしめてあげようかな
真ん中にいる、玩具の中でも一番大きな船に手を伸ばしてみた

＊＊＊＊＊

「て、提督、煽るのは止めてくださいよ」
「がたがたいうな！くだらない泣き言をいう間があったら、ターゲットに向かって撃ちまくれ！」
「しかし提督、いくら大砲を撃ち込んだところで、あの巨大すぎる標的にダメージを与えることなど・・・」
という必死の抗弁が、ふいにぴたりと止まった
急に、それどころではない威圧感が襲ってきたのだ
陽光が遮られ、やや薄暗くなった空の底が抜けて、地表に落ちてくる
実際には、それまで聳え立っていた超巨大娘が、膝を突き、腰を曲げて、艦隊の上空に覆いかぶさるように四つん這いになったのだ
見上げる空が、全て超巨大美少女の裸身に置き変わっていた
・・・
とてつもない巨大さである
これが一人の人間の、しかも若い少女の身体だというのか
・・・
逆らえるはずがない
水兵たちは、大きさの差、力の差を見せつけられて、言葉を失った
・・・
・・・
・・・
しかし、時すでに遅し
ブレフスキュ海軍艦隊は降伏のタイミングを逃し、この超巨大少女に蹂躙されるしか道が残されていない
「う、うわあああああああああああああああああ」
羽ばたいた巨龍のような手が上空から降臨してくると、フラッグシップを鷲掴みにして、あっという間に天空に引き上げていってしまった

＊＊＊＊＊

いま、わたしの手の中に小さな船がある
ブロブディンナグ人のわたしにとっては小さな玩具
でも乗り組んでいる大勢のブレフスキュ人たちにしたら超弩級巨大戦艦
ぷふ
すっごい優越感
ほらほら、みんな、早く命乞いしなさいよ
早くしないと、このままギュッと、船ごと握りつぶしちゃうよ
てか
やってみたいなあ
わたしのウルトラ大巨人パワーを、見せつけてあげたいなあ
ほらほらほらほら

うーん、大きいって、最高！
・・・
・・・
あ
・・・
いっけない、またマン汁溢れ出してきちゃった

＊＊＊＊＊

「・・・」
さっきまであれほど威勢の良かった提督が、言葉もなくその場に崩れ落ちている
現実は残酷だ
彼が思い描いていた戦略など、妄想でしかなかった
敵は巨大すぎる
巨大すぎるなんてものじゃない
上空の視野全体が敵の顔だ
こちらを見つめて嘲り笑っている
いま、至近距離からその姿を見せつけられて、自分たちの無力さを思い知らされた
手も足も出ない
頭の中が真っ白になった
全てを失った提督が虚ろな目で静かに失禁・脱糞している様子を横目で確認すると、副官はおもむろに声をあげた
「・・・白旗を揚げろ」
周囲の水兵たちが確認する
「いいんですか？」
「いい、これからは私が指揮を執る」
副官は自分にいい聴かせるように大きく肯いた
「降伏だ・・・ブレフスキュ海軍は、この人間山女に対して無条件に投降する」

＊＊＊＊＊

手の中の船が白い旗を揚げてきた

白旗って
・・・
降参ということね
ま、当たり前かな
わたしだっていつまでもこうして玩具の艦隊相手に遊んでいたいけど、そうもしていられないのよ
だって、「悪いブレフスキュを懲らしめる」という大切な任務の真っ最中だったんだからね
ガリバー娘は、手の中の戦艦を足元の海面にそっと戻した
「・・・これから 10 分だけ待ってあげる」
足元の海面に展開する艦隊に向かって厳しい口調で語りかける
「10 分後、今おろした船を除いた残りの船は、一艘残らず沈めるわ。一艘残らずよ。だからみんな、急いでこの船に移乗してね！10 分よ！10 分経ったらすぐに沈めちゃうからね！」

これを聴いた艦隊の水兵たちは我先にと救命ボートに乗り移り、ガリバー娘の足下のフラッグシップを目指した
訓練を重ねたプロの船乗りである彼らは、脱出も迅速である
10 分で全員が移乗を完了したかどうかはともかく、5 分もたたないうちに全員が下船は完了した
ガリバー娘はこの様子を満足そうに見下ろすと、おもむろに片足を上げて、ブレフスキュ海軍の艦船を片っ端から踏み沈めていった
瞬く間に、フラッグシップを除く全艦が海の藻屑と消えていく
水深 400 リリパット・メートルというそこそこの深さを持つ海に、踏み沈められるのである
もともとブレフスキュ海軍に勝利のチャンスなど全くなかったのだ
力の差をまざまざと見せつけられた水兵たちの目の前で、こうしてブレフスキュの誇る艦隊は壊滅させられたのであった

＊＊＊＊＊

リリパット島の対岸にあるブレフスキュ島
ブレフスキュ共和国はリリパット王国の宿命のライバルである
気候が温暖で土地も肥沃な緑の島ブレフスキュは農業大国であるが、科学技術・経済もおいてはリリパットにやや及ばない
この劣勢を挽回するために、かつてブレフスキュは軍備を整え、リリパットに侵攻することを企てていた
この計画を潰したのがあの伝説の巨人レミュエル・ガリバーである
レミュエル・ガリバーによって自慢の艦隊を根こそぎ鹵獲されてしまったブレフスキュは、しばらくの間、海軍を有さない方針を保ってきた
そんなわけで、以降数百年の間、この両国間に軍事衝突はなかった
それではこの両者は平和的共存関係にあったかと言えば、必ずしもそうではない
平和的共存に見えて、経済力に勝るリリパット王国は、ブレフスキュ共和国を事実上の経済植民地にしてしまったのだ
馬鹿にするな！
不満を募らせてきたブレフスキュは、ついに立ち上がる
数百年ぶりに海軍を設置し、着々と増強させた
目指すは永遠の宿敵・リリパットへの侵攻
このブレフスキュの悲願がまさに達成されようとしていた
まさにそのタイミングで、ブレフスキュを悲劇が襲ったのだ
歴史は繰り返す

かつて伝説の巨人レミュエル・ーの前に苦汁を呑んだブレフスキュ海軍は、今度はその伝説の巨人よりも遥かに巨大な全裸の超巨大美少女によって、完膚なきまで叩きのめされてしまったのである
海軍艦隊壊滅の報を受けて、ブレフスキュ共和国内の緊張はMAXに高まった
とはいえ、頼みの海軍が壊滅した今、もはやブレフスキュを防衛する手段はない
どうすれば良いのか
・・・
と焦る間もなく、とん、とん、という小刻みにリズミカルな地震が海上から近づいてくる
超巨大少女だ
ざぶざぶ海を渡ってきた超巨大娘は、固唾をのんで見守るブレフスキュ人たちの目の前で、あっという間に島に上陸した
艦隊との交戦が終了してからわずか2分余りである

「・・・ブレフスキュの皆さん、リリパットを侵略しようとした皆さんの悪だくみは露見しました。無駄な抵抗は止めて、ただちに降参してください。さもなくば、これからわたしがお仕置きをします・・・」

ブレフスキュ共和国軍の戦闘機がただちにスクランブルした

＊＊＊＊＊

「・・・ブレフスキュの皆さん、リリパットを侵略しようとした皆さんの悪だくみは露見しました。無駄な抵抗は止めて、ただちに降参してください。さもなくば、これからわたしがお仕置きをします・・・」
・・・
決まったかな？
わたしは悪の帝国をたった一人で懲らしめにきた正義の大巨人少女
ほらほら、あなたたち悪役なんだから、ああはいったけど無駄な抵抗してごらんなさいよ
ねえ、無駄な抵抗を
・・・
って
・・・
きたきた
戦闘機だ
何機も揃ってごくろうさん
ぷふふ
でも、小っさすぎ
ご自慢の戦闘機なんでしょうけど、わたしには小バエくらいにしか見えないよ
ほうら、攻められるものなら攻めてみてごらんなさい

ガリバー娘は仁王立ちになって両手を腰に当て、ふんぞり返って戦闘機の前に立ちはだかった
これだけ馬鹿にされたら戦闘機も黙ってはいない
ガリバー娘の身体の周囲を急旋回しながら威嚇して
・・・
・・・
そこまでだった
何しろ敵は巨大すぎる
この戦闘機に搭載してあるミサイルごときでは何のダメージも与えられない
だからミサイルを発射する気にもなれない
威嚇のために急旋回を繰り返しているが、これが威嚇になっているのかも大いに疑問だ
むしろ叩き潰されないように身体の周りをぶんぶん飛び回って逃げているヤブ蚊みたいではないか
・・・
いや
実際にそうなのだ
こんな戦闘機部隊では、この超巨大少女に髪の毛一本のダメージを与えることもできない
そんな虫けら以下の我々が、威嚇するなどちゃんちゃらおかしい
潰されないよう逃げ回っているだけだ
何の意味もない
戦意をすっかり喪失した戦闘機部隊は、打ちひしがれながら徐々に前線から離脱していった

＊＊＊＊＊

これよこれ！
最高にいい気分
わたしは無敵の超巨大美少女よ
どう？
手も足も出ないでしょ？
わたしの巨大さ、思い知った？
ああ、このパイロットたちの絶望感や屈辱感がビリビリ伝わってくるわ
悔しいでしょ？
悔しいんでしょ？
だったら、ほら
・・・
・・・
って
あれ？
・・・
もうおしまい？
ミサイルが飛んできたらそのまま受け止めて力の差を見せつけてやろうと思ったのに、その見せ場の前に戦闘機たちが退散してしまった
うーん

もう、情けないわね
じゃあ、地上部隊はどう？
ほらほら、戦車部隊よ
こういうときは戦車がずらっと並んで無駄な抵抗してくれるのが定番でしょ？
それを無慈悲に踏み潰す
あああ、やってみたかったのよね
で、戦車、戦車って
・・・
来ないの？
え？
もう無駄な抵抗してくれないの？」
・・・
・・・
つまんないなあ
・・・
ちょっと煽ってみようかしら
「逃げても無駄よ！あなたたちなんか、まとめて踏みつぶしてあげるわ！」

＊＊＊＊＊

平和に暮らしていたブレフスキュ人たちの日常は、突然現れた全裸の巨大美少女によって根底からひっくり返された

「逃げても無駄よ！あなたたちなんか、まとめて踏みつぶしてあげるわ！」

頭上に高々と超巨大な生足が掲げられる
あんなものが振り下ろされたら、このあたりの街はまるまる一ブロックがぺしゃんこになる
逃げろ！
逃げるしかない！
逃げなきゃ踏みつぶされる！
罪もない普通の人間の我々を、超巨大で冷酷な裸の小娘が踏みつぶす
こんな理不尽を、どうして受け止められようか
でも、あれほどの超大巨人を、ブレフスキュの軍隊が止められるはずもない
実際に、主力である海軍艦隊はあっさり壊滅させられたそうだ
もう自分たちの身を守ってくれる存在はない
踏みつぶされないよう、自力で逃げるんだ
それしかない
逃げろ！

ブレフスキュ人たちは血眼になって、涙目になって、走り、逃げ回った

＊＊＊＊＊

悪の帝国・ブレフスキュ
それを懲らしめにきたわたし、正義の巨大美少女ガリバー娘
・・・
という構図のはずだったのに、ブレフスキュ人たちは全然無駄な抵抗をしてきてくれない
わたしの足下でちょこちょこ逃げ回るだけ
きゃあきゃあという甲高い悲鳴が僅かに聞こえてくる
・・・
ちょっとちょっと
ねえ、ブレフスキュさん、それ、悪役キャラとして落第でしょ？
これじゃまるでわたしが弱い者いじめしてる悪の大巨人みたいじゃない
その構図はちょっと嫌だな
・・・
・・・
じゃあ、作戦変更
せっかくこびとの街で大暴れできるチャンスだったけど、それはちょっと置いといて、このブレフスキュという国に要求をのませる、という本来の目的を最優先にしよう
となれば、交渉ね
「ブレフスキュ共和国政府の皆さん、あなたたちにお話があります。交渉しましょう。これは命令です。拒否するという選択肢はありません」

＊＊＊＊＊

「ブレフスキュ共和国政府の皆さん、あなたたちにお話があります。交渉しましょう。これは命令です。拒否するという選択肢はありません」

間違いない
これは無条件降伏の勧告だ
この超大巨人に屈服しろということか
いや、どうもこの超巨大少女はリリパットの政府と繋がっているようだ
ならば、リリパットに無条件降伏しろということか
ブレフスキュにとって長年の宿敵、リリパット
このリリパットを倒すため、地道に軍事力を増強させてきた
国民の全てが痛みを分かち合い、歯を食いしばって、軍事力の増強に協力してきた
全ては宿敵リリパットを打ち倒すためだった
ブレフスキュ国民の悲願だった
その悲願が、たった一人の小娘によって台無しにされようとしている
たった一人の小娘
だが、軍隊が束になって掛かっても太刀打ちできないウルトラ大巨人の小娘
どうすることもできない
国民の命を守るために、屈辱的な条件を呑まなければならない

・・・
・・・
ブレフスキュ共和国の大統領は決断した
「・・・わたしが行く」
側近たちは慌てて押しとどめる
「大統領閣下、危険です。閣下にもしものことがあったら国が持ちません。ここは安全が確保された後方からご指示を・・・」
「いま、このブレフスキュに安全が確保された後方なんてない、それに・・・」
大統領は側近たちをぐるりと眺め渡す
「・・・今こそがブレフスキュ共和国の存亡の危機なのだ。どのような交渉となるにせよ、その場で決断する必要がある。その決断を下せるのは、このわたししかいない。違うかね？」
立憲民主主義とはいえ未だに階級社会の様相が色濃く残っているリリパット王国とは異なり、ブレフスキュ共和国は誰にでものし上がるチャンスがある国だった
貧農の家庭に生まれながらも才覚一本でこの地位に昇り詰めたこの大統領はその典型であり、それだけに国民の誰もから強い敬愛の念をもたれていた
リリパット、ブレフスキュとも、さすがにトップに君臨するのは一角の人物だったのである
側近たちも肚を決めた大統領を翻意させることはできなかった
「それならばせめて、我々もお供させてください。全力で、大統領閣下の身を守ります！」
「ふん・・・好きにしたまえ」
こうしてブレフスキュ共和国の政府・防衛軍の首脳陣は悲壮な決意のもと、全員総出で政府チャーターのヘリコプターに乗り込んだのである

＊＊＊＊＊

高度 2600 リリパット・メートル
なだらかな丘陵地帯が続くブレフスキュ島に、この標高に達する地点はない
そこまで上昇して、ヘリコプターは初めて巨大な侵略者と正対することができた
窓から望む正面方向の景色が全て薄笑いを浮かべた超巨大少女の顔に置き換わる
しかも、見ている
その超巨大な顔が、間違いなくこのヘリコプターに焦点を合わせて見つめている
乗り組んでいるブレフスキュ共和国首脳陣たちは、ただちに逃げ出したくなるほどの恐怖を覚えた
その中で、大統領だけが落ち着いている
「・・・こうやって近くで見ると、でかいけどなかなか可愛い顔をしてるじゃないか」
「だ、大統領！」
「おっと、ルッキズムと受けとられる発言をするとマスコミに叩かれるな、はっはっは」
軽口をたたくのはそこまでだった

「これは交渉に応じる、ということですね？」

突然超巨大少女が言葉を発した
大音声が轟き渡り、風圧でヘリコプターの機体が揺らいだ

大統領は気丈にマイクを握る
「わたしはブレフスキュ共和国の大統領だ。交渉に応じよう」
これは無条件降伏の勧告だ

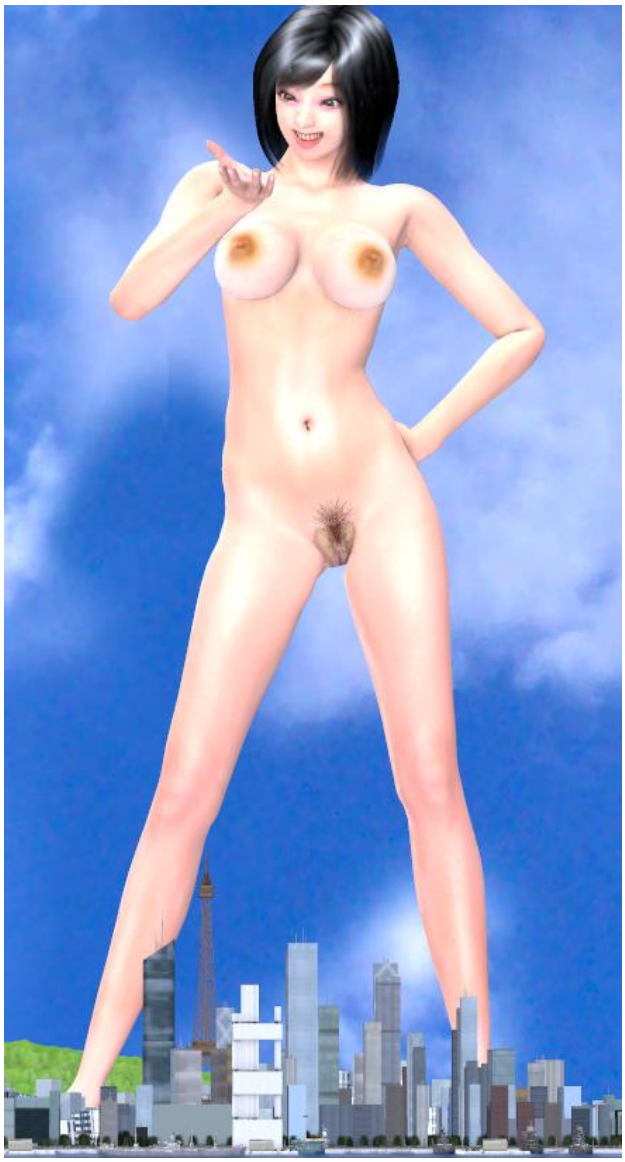
「くふふ、そうですか。それでは皆さん、わたしの手のひらの上に降りてください」

ヘリコプターの前に巨大な手が差し伸べられる
侵略者である超巨大少女の手のひらの上に降りる？
普通ならそんな危険なことをするはずがない
ただ、いまこうして超巨大少女と二言三言の会話を交わしただけで、ヘリコプターが常に風圧のために墜落の危険と隣あわせでいることがわかった
これでは確かに落ち着いて交渉もできない
そもそも、この超巨大少女がその気になれば、こんなヘリコプターくらい鼻息で吹き飛ばされてしまう
手のひらにのせられていることと状況は変わらないではないか
大統領は肯いた
側近たちも、全てこれに従った

＊＊＊＊＊

「・・・」
ヘリコプターから降りて、肌色の柔らかくて暖かい平原に降り立つ
誰も一言も発しない
発することができない
・・・
これが超巨大少女の手のひらだ
ブレフスキュ国立サッカー場がすっぽり収まっても余りある広さ
この広さなので標高 2000 リリパット・メートルを超える高さにあっても、高所ならではの恐怖感はない
そもそも高い所にいる実感がないのだ
見上げる真正面に馬鹿馬鹿しいほど巨大な肉塊が鎮座している
剥き出しの乳房だ
登山するには小一時間くらいかかりそうな丸い肉の巨塊
どうだ、これでもか、という感じにどーんと突き出されている
その先端の乳頭だけでも素人が登るには苦労しそうだ
その偉容は見る者を圧倒する
それだけではない
匂う
乳臭く、汗臭く、甘くて、すえた、それでいて爽やかな、決して不快でもない強烈な体臭が、この山の狭間からむわんむわんと立ち上ってくるのだ
手のひらの上で立ち尽くすブレフスキュの政府高官を、その匂いだけで目が回りそうだ
これが少女の乳房なのだ
そのあまりに巨大な乳房を前に、彼らは萎縮した

ところが、その上があるのである
山そのものの乳房のそのまた上
上空全体の視野を占拠する超巨大少女の顔だ
さっきはヘリコプターで至近距離から覗き込まれてその巨大さを思い知らされた
今度は上から見下ろされてまた新たにその巨大さを思い知らされた
自分たちが高いところにいる実感がなかったのは、更に高いところから見下ろされていたからだ
この少女はどれだけ巨大なのか
その手のひらに乗せられた自分たちは、どれだけ卑小なのか
蟻だ
自分たちは惨めなアリンコだ
・・・
交渉する？
こんな巨大な相手と交渉する？
自分たちは交渉相手となるような立場なのか？
わけないだろ？
政府高官たちの心は折れた
恐怖と絶望と屈辱で、その場に倒れ込む者
崩れ落ちて頭を抱える者
失禁する者
普通のメンタルで耐えられるわけがない
ならばまともな交渉も成立しまい
それが狙いであったとすれば、超巨大少女の目論見はまんまと的中したといえよう
・・・
ところが
この男のメンタルだけは普通でなかった
大統領である
既に機能不全に陥った周囲の側近たちを後目に、上空の超巨大少女の顔をきっと見据えると、マイクのボリュームを最大限にして堂々と交渉を開始した
「それでは約束通り、交渉を開始しよう」



「わかったわ」

超巨大少女はにっこり笑って肯く
まずは友好的な滑り出しだ
「まずはこちらの条件提示だ」

「どうぞ」

「ブレフスキュ共和国の国民の安全を保障してほしい。それが絶対かつ唯一の条件だ。国民の命が守られるならば、主権は貴女にでも、リリパット王国にでも、無条件に差し出そう。誰か責任を負うべき者が必要なら、喜んでわたしが首を差し出す。その代わり、わたしの他のブレフスキュ共和国国民には指一本触れないでもらいたい」

「・・・」

超巨大少女は黙り込む

不気味な沈黙に耐えかねて、大統領が言葉を続けた
「・・・これでは、不満かね？」

「何言ってるの？」

「？」

「ブレフスキュ共和国の国民の命とか、主権とか、ましてやあなたの首とか、ぜーんぜん興味ないし」

「？？？」

「そんな欲しくもないものを並べられても交渉になんかならないわ」

「それでは・・・貴女の要求とは？」

「サービスよ」

超巨大少女はきっぱりと言い放った

「リリパットでは大勢の人たちが集まってわたしにサービスしてくれたわ」

「サービス？」

「そう、サービス、つまりわたしを気持ちよくさせてくれること」

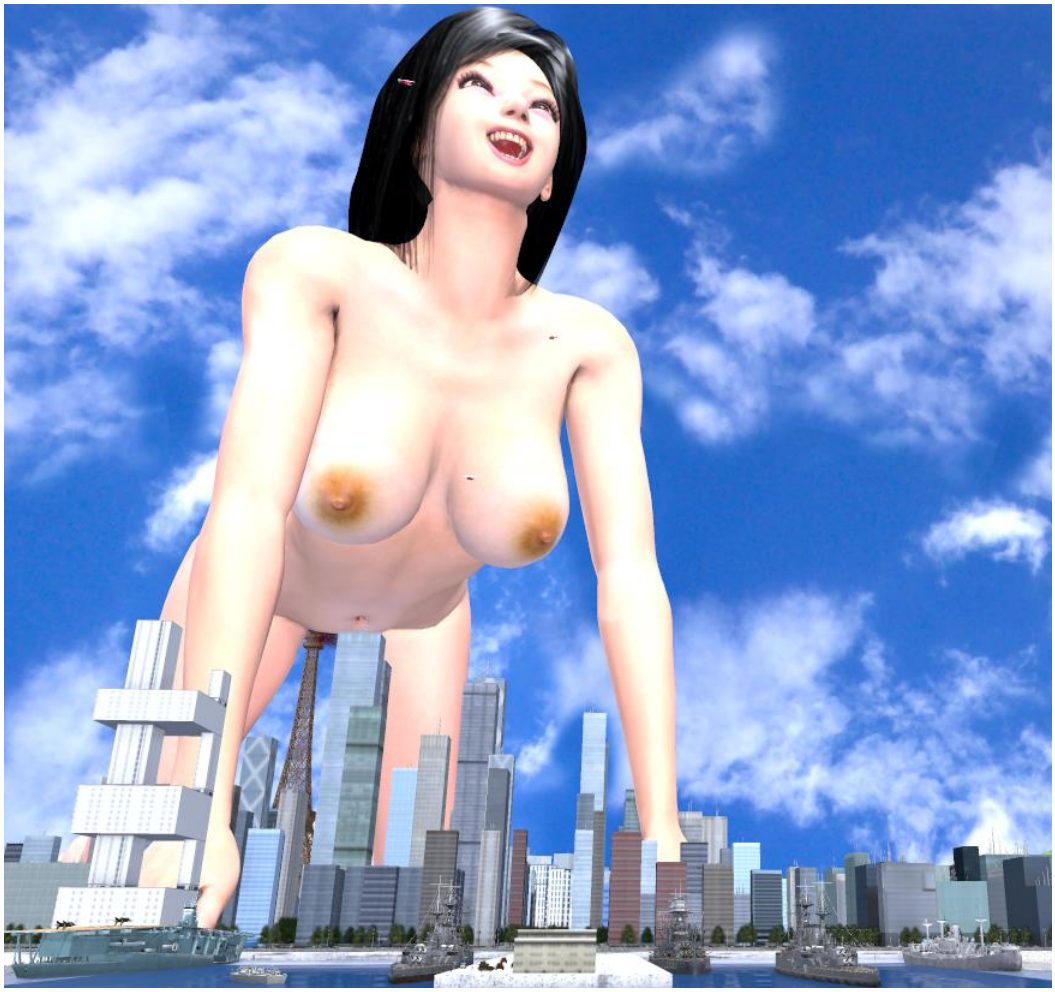
「！！！」

「できる？ブレフスキュはリリパットがしてくれたよりももっと気持ちいいサービスしてくれる？もしもあなたたちがすんごいサービスしてくれるなら、わたしは貴方たちの代わりにこれからリリパットを蹂躙してきてもいいわよ❤️」

「やります！」
大統領は即答した
「やります！やりますとも！ブレフスキュ共和国の全てを挙げて、貴女の腰が抜けるほどすんごいサービスをしてみせますよ！！！」

＊＊＊＊＊

「あああああああああ」
うーん、なかなかいいじゃない
さすがにブレフスキュ共和国の全てを挙げたサービス、と啖呵を切ったことはあるわね
軍隊の皆さん大ハッスル
この国のシンボルのブレフスキュ・タワーを惜しげもなく提供してくれたしね
こうやって国の象徴をちんぽ扱いしてみんなに見せつけえっちするの、最高だわ
これぞ巨人の特権！
ただ、太さはリリパットタワービルの方が上かしら
でもこのブレフスキュ・タワーの鋭角的な感じもいいわね
うーん、どっちのサービスが上等か、迷っちゃうなあ



・・・
そうだ、またこれからリリパットに行ってサービスしてもらおう
そうしたらまたまたブレフスキュに戻ってサービスしてもらおう
最終的な敗者はわたしにぼこぼこに踏みにじられる
それが嫌なら頑張ってサービスする
そう、交渉はギブ・アンド・テイク
敵国を蹂躙して欲しかったら、それだけわたしにサービスしなきゃね
あーあ、どっちにしようか、迷っちゃう❤️
ブロブディンナグから持ってきた水や食料はまだまだあるし、あと一週間近くは楽しめるわ
あ、一週間たったらいったんブロブディンナグに帰るけど、もちろん水と食料を補給してまたすぐに戻ってくるからね

ガリバー娘の冒険は、まだ始まったばかりである

ガリバー娘の冒険・終